

# 新岡垣風土記

第416回

## 古文書で探る庶民のくらし

—高倉さんとコブの源助—

岡垣歴史文化研究会 羽山 健一

「高倉さんとコブの源助」は、新作の民話である。この民話を昔からの伝承民話と誤解した人も多いので、その成立から現在に至る経過を説明する。

①昭和56(1981)年8月、遠賀町木守在住の故中原三十四氏が、新作民話集『大人むき遠賀町新民話』を20部限定の手製本で発行した。その第1話が「こぶの源助」である。非常に面白くて、先生のユーモアが偲ばれる内容である。文末には原拠とした史料の釈文も載せている。

②昭和62(1987)年4月頃、「新岡垣風土記」で町内の民話特集を計画した。筆者は、コブの源助の話をも町民に紹介したいと思い、中原先生に相談した。先生から、紙面の制約もあるから、筆者が新作するよう勧められた。

③昭和63(1988)年5月、広報おかがき第286号の「新岡垣風土記」で、筆者新作の「高倉さんとコブの源助」を掲載した。記事の文末に、参考引用文献『大人むき遠賀町新民話』(中原三十四著)を追記し、原典史料の説明も行っている。

④その後、民話「高倉さんとコブの源助」は『岡垣町伝承民話集』(神谷虎雄著)と岡垣町伝承民話集「むかしばなし」(岡垣町教育委員会発行)に収載されたが、筆者の追記部分は紙面の都合で割愛されたのである。この両書が伝承民話集であることから、町民に誤解を与え今日に至るのである。

さて、この民話の原典史料は、海妻甘蔵が著した『三百齋雑録』である。

海妻甘蔵は、福岡藩士で藩校甘棠館の教授を務めた。その後、

岡垣町吉木に移住し、吉木小学校前の廃寺で私塾己百齋を開き、近郷の青少年を教育した。高齢となった甘蔵は、福岡へ帰り『三百齋雑録』を著すのである。

同書には、岡垣の産物や人物の記事もあるが、今回は民話に関する部分を紹介する。

筑前遠賀郡尾崎村民源助、耳の下に瘤を生ず。忽ち太りて米二升を入れるべき袋の如し、医も治療を難んず。源助思へらく、産土神に頼る外なしと身を清め、二里外なる高倉神社(日本書紀に出たる大



▲岡垣町伝承民話集「むかしばなし」より転載

倉主・菟夫羅の旧社也)に詣で、満十二ヶ月日参を期し、瘤の治癒を祈る。既に八九ヶ月を経るに寸験なし。他人或は笑ひ、或は嘲り曰く、高倉は神なり、鬼に非ず、争か瘤を取らん。源助これを耳に入れず、毎朝参詣怠りなし。或夜、瘤癒ゆと夢む、覚るに元のままなり。源助心を痛め、猶も斯くの如く翌朝参詣す。帰路、社壇石段の半にして、耳の下忽ち寒涼を覚ゆ。石段を全く下り井の側に至る。即ち、瘤潰れ水計夥しく発漏し、瘤は治したり。是れ実に文政十年丁亥なり。源助深く感じ社司に上申し身をそそぎ参拝し、以後毎月其日を定めて寸志社頭を掃除す。社地甚だ広し、掃除を慎重に勉む。高倉村庄屋波田幸次郎より社司と議り、社家判に加へ注連係とす。嘉永の末まで高齢の身を以て勉むと、高倉記録に見ゆ。

尾崎村は、現在の遠賀町大字尾崎である。

源助は、文政10(1827)年から20年以上清掃を続けたのである。その労に報いるため、庄屋や宮司が郡役所に働き掛けて社家判(神社戸籍)に編入させ、源助に種々の恩恵を与えて庇護したのである。

おわり